

地域と福祉を心でつなぐ

NETWORK **こぶし** ネットワーク

2024

4

通巻40号

令和6年4月発行

巻頭

令和6年度のスタートをきって

～地域の皆様からの「こぶし園」という信頼を得続けるために～

社会福祉法人長岡福祉協会 高齢者総合ケアセンターこぶし園 総合施設長 船越芳之

トピックス

・災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバードの成り立ち・仕組み・取り組み

～支え合いの中に日常生活があることへの気づき～

・こぶし園は42周年を迎えました

～そのこぶし園の取り組みを紹介します～

こぶし園 インフォメーション



令和6年度のスタートをきって

「地域の皆様からの「こぶし園」といって

信頼を得続けるために」

高齢者総合ケアセンターこぶし園

総合施設長

船越 芳之

日頃より、ご利用者様ご家族様・地域の皆様におかれましては、私ども高齢者総合ケアセンターこぶし園の運営にご指導、ご支援をいただき職員一同深く感謝申し上げます。

例年にならない暖冬で穏やかに迎えた1月1日に能登半島で大きな震災が発生いたしました。被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げますと同時に、一日も早い復興、そして普通の暮らしが戻ります事をお祈りいたします。

さて、1982年4月に開設し



たこぶし園は42年目を迎えました。人材難と言われる中ですが、共に働く新しい仲間たちにも恵まれ新年度をスタートしたところです。

2023年は新型コロナウイルスが5類へ移行し、ウィルスと共存しながら少しずつ日常が戻ってきました。私たちの普段の仕事においても、ご家族やサポートセンターで行う活動における地域の皆様との関りが再開できたことは非常に喜ばしい事です。本年度もこのコロナ禍で学んだことを活かし、引き続き感染対策を行いながら、質の高いサービスの提供に努めて参ります。

2024年は6年に一度の診療報酬、介護報酬及び障害福祉サービス等報酬の同時改定が行われています。これは社会情勢や環境の変化に対応する為に、定期的に見直しが行

われているものです。

先の事と感じていた2025年は目の前に迫ってきています。厳しさを増す社会情勢の中、高齢者人口がピークを迎える2040年に目を向けていかなければなりません。

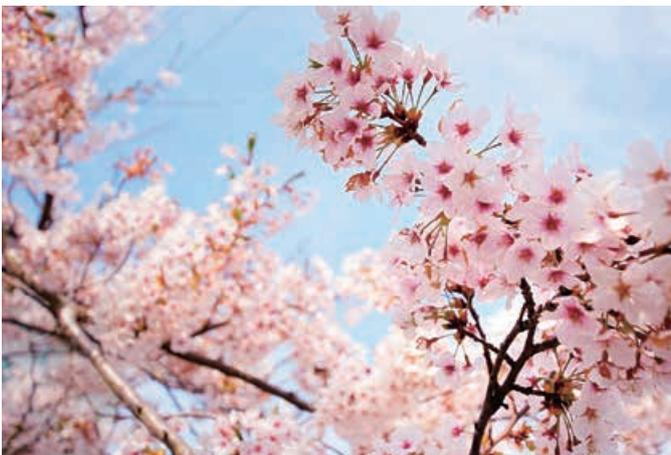
その様な中、こぶし園は本年度の基本方針を

○地域共生社会に向けた地域包括ケアシステムの深化・推進への取り組み
としております。

高齢者の暮らしを支える為に、開設以来取り組んできた各種サービスと合わせ、小規模多機能型居宅介護や定期巡回・随時対応型訪問介護看護等の包括報酬サービスを軸とし、利用者の意思決定を支援することができるよう介護と医療の連携を目指し、看取りケアを充実させていきます。

す。また地域ニーズを把握し、市内19か所のサポートセンターそれぞれが「まちのね」や「オレンジカフェ」などの地域活動にも更に力を注いでいきます。

最後に、本年度も私たちこぶし園の理念である「その人の築き上げてきた暮らしを支える」のもと、地域で暮らす皆様の安心した生活を支える事を念頭に邁進してまいります。引き続きのご指導をどうぞよろしくお願いいたします。



災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーボードの成り立ち・仕組み・取り組み ～支え合いの中に日常生活があることへの気づき～

【はじめに】

「災害列島」である我が国において、有事の際に医療・福祉の現場が地域を支えることはとても重要なことです。この度の「令和6年能登半島地震」においてもDMAT（大規模災害時等に活動する医師・看護師・薬剤師や事務職員等で構成される災害派遣医療チーム）やDWAAT（避難所や被災した福祉施設等を福祉や介護の面から支援する災害派遣福祉チーム）が被災地で活動を行っています。

【サンダーボードについて】

皆さんごじ園の小山剛前園長が中心となり立ち上げた「災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーボード」はご存知でしょうか。

サンダーボードの前身は「安全安心医療福祉研究会」です。この研究会は、医療福祉従事者やそれ以外の人々が「災害」について共に考えることを目的とし、「連携」を一つのキーワードとして勉強会を重ねていました。そして、その活動の中で2005年4月にごじ園の視察が行われました。

2004年10月23日に発生した新潟県中越地震では多くの人たちが自宅以外での生活を余儀なくされ、特に要介護状態にある方の多くが近隣の施設などに避難しました。他の福祉施設と同様ごじ園も被災者受け入れのために即応し、事業所の空きス

ペースを活用し最大250名を超える方の対応を行っています。

その後、被災し住宅を失った方々のために、現在の長岡市民防災公園の場所に459戸の仮設住宅が設置され、1,200人がそこで生活をする事となり、その内約3割が高齢者でした。

地震発生直後に国土交通省から意見を求められたごじ園は、その場所に「サポートセンター」の設置を要望し、通所介護・訪問看護・訪問介護・在宅介護支援センター・3食365日の配食サービス・地域交流スペース・介護予防事業や各種相談窓口を備えた「サポートセンター千歳」が開設されました。

仮設住宅で暮らす高齢者や、それ以外の人たちをも支える場所として設置されたサポートセンターは、そこで暮らす住民のコミュニティの拠点となり、また介護予防や各種相談、見守りにも力を入れました。そして長岡の厳しい冬を乗り越えて2年間の役割を果たし、入居された方それぞれが元の暮らしに戻る事が出来ました。



サポートセンター千歳の外観

視察の後、この取り組みに感銘を受けた参加者から「全国どこで災害が起きても、ごじ園のような対応ができる仕組みをつくる」との声が上がりました。2005年8月に「災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーボード」が発足。2006年にNPO法人の認可を受け「特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーボード」となりました。

2024年現在東京を本部として、全国に10の支部活動を展開し、災害時における広域（被災地外）的な人的・物的支援、長岡同様のサポートセンター設置に向けた支援、災害準備のためのBCP作成や避難支援手法検討支援など、いっどこで災害が発生しても迅速に、適切に機能する災害時要援護者の支援ネットワークを構築するための活動を行っています。

【おわりに】

医療や福祉の仕事は災害が起きても中断する事はできません。災害時には自衛隊や警察、消防と同様に医療や介護が連携し支援体制を素早く広域で展開する事、そして避難所や仮設住宅など一時的に暮らす場所が変わっても、それまでの人間関係や受ける介護の仕組みを変えず中長期的に支援し続ける事が必要です。このこと

は、私たちが日頃より取り組んでいる「地域包括ケア」そのものと言えるのではないのでしょうか。



こぶし園は42周年を迎えました

そのこぶし園の取り組みを紹介します



初めに

「特養解体」そして「住まい」の実現

歳を取っても最期まで住み慣れた自宅や地域で過ごしたい。多くの方がこのような想いを持っていらっしゃるのではないのでしょうか。

特別養護老人ホームこぶし園は、新潟県内20番目の特養として1982年4月に定員100名で深沢の地に開設しました。こぶし園のみならず当時の特養は市街地から遠く離れた郊外に建てられ、4人部屋をはじめとする多床室が基本。施設自体の規模も大きく、入所は広域の市町村からと、ご利用者にとっては暮らし慣れた地域や社会から切り離され、見知らぬ人々との集団生活を余儀なくされる状態に置かれました。また当時の特養は社会福祉の制度上、行政による入所の決定がなされる「措置」であり「収容保護」という考え方であったため、ご利用者の権利や生活という観点は薄く、ご利用者と施設が対等の関係でご利用者が自己



選択・自己決定を主体とした「福祉サービス」の仕組みの基礎となった1990年代の福祉関係法の改正を経て、2000年の介護保険法施行以降の今日から俯瞰すると、驚くばかりです。

そのような時代の経験を経る中で、故・小山剛前園長のもと、こぶし園は「もし自分が介護サービスや施設を利用するとなったらどうか？」という自問の視点で、特養に入られたご利用者を住み慣れたもの地域で暮らすことができるようにしようと国に申請を行い2006年から深沢の特養100名の皆様を、順々に地域に戻す取り組みを始めました。既存の大規模集約型の特養を解体し、地域ごとに整備する15〜20名定員の小規模特養に住み替えて頂くこの取り組みは同年の美沢以降、千手、撰田屋、川崎、そして2014年に深沢の本体特養が喜多町へ移転・増床し、完結を迎えました。（※途中で法人の施設再編に伴い、千秋が加わっています）

それぞれの特養は従来の多床室ではなく個室を整備、ご利用者の尊厳やプライバシーが確保され、居室はご利用者がご自宅で生活されていた時と同じような空間の再現や設えを基本とし、ご利用者のニーズや生活パターンに沿った個別ケア、施設ではなく住まいであるという考え方を大切に、そして往來のしやすい立地の中で、ご家族や地域の方々との交流や社会との繋がりも日々普通のこととして成り立つよう今日に至ることができました。

以降の項では、日々の生活や現在の取り組みを通し、

特養のサービスについて紹介させて頂きます。

地域交流の機会を いただいでこそ広がる輪と波及効果

「国は、平成28年6月に閣議決定された「二ツポン一億総活躍プラン」の中に『地域共生社会の実現』を盛り込み、「支え手側」「受け手側」に分かれるのではなく、子供、高齢者、障がい者などを含めた地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らししていく仕組みを構築しようとする取り組みです。

こぶし園のサポートセンターは、その一助として介護の拠点の他、相談機能を備え、介護を必要とする人やそのご家族及び住民の皆様との交流拠点として活用頂いております。

一例として特別養護老人ホーム撰田屋（サポートセンター）（以下、SC）撰田屋と特別養護老人ホーム川崎（SC川崎）の地域交流をご紹介します。

SC撰田屋は住宅街に囲まれた施設で、撰田屋5丁目の町内会に入会しており、防災訓練・夏祭り・文化祭は町内の行事と日程を合わせて実施しています。

また、SC川崎も住宅街に位置しており、地域交流スペースを地域の介護予防サークルの会場としてご利用いただき、地域の方と事業所のご利用者と一緒に脳トレなどの介護予



時代の流れに沿った 情報機器との共存

防トレーニングを行っております。(コロナ禍により休止中。状況を見て再開予定)そして、両センター共に、地域の夏祭りでは毎年ごども神輿が立ち寄り、子ども達の勇敢な姿に、ご利用者も職員も自然とかけ声が上ががり、笑顔が広がります。

そして、真夏の一時の休憩所としてテラスや交流スペースを活用して頂いております。

どのような状態になっても地域の中で継続した生活が送れる地域共生社会の実現のため、行政やサービス関係者と共働して地域力の強化に貢献していきたいと思っております。

こぶし園では、ICT機器の導入も進めており、各特養でも其々取り入れて活用しています。

現場でのケア実施記録をタブレット内に入力し業務効率化を図る電子記録システム、業務中での職員間の情報共有にインカム、各居室にバイタルや睡眠データ等を検知する見守りセンサー、排泄状況を検知する排泄センサー等があります。



効率化を図ることができました。結果として入居者との直接的に関わる時間が確保され、個別ケア対応や、迅速な情報共有により、ケアの二元化にも繋がっています。排泄センサーでは、排泄介助毎に確認の声掛けをせずともデータで把握でき、双方の精神面でのストレス軽減にも繋がっています。

摂田屋、美沢では今年度タブレットの導入に加え、新たにインカムを導入致しました。

今までは情報共有の手段としてPHSを使用していましたが、その台数には限りがあり、持っていない職員への情報共有や職員探し等の時間がかかっていました。全職員がインカムを利用することで、リアルタイムでの情報共有・引継ぎが可能になりました。ユニット間での離れた場所でも瞬時に職員間で情報共有ができ、入居者様へのスムーズな対応や緊急時の迅速な対応など幅広い効果が期待できます。実際に使用して約3か月が経過しましたが、職員も連携力の強化を実感しています。

こぶし園をはじめ、福祉・医療の現場はマンパワーで成り立っています。少子高齢化の時代に差し掛かり、マンパワーを直接の援助へと注力するため、ICT機器の導入を一つとし、今後もさらなる取り組みを進めてまいります。



長岡市千手3-1-14
TEL: 0258-31-3263
FAX: 0258-34-7340

③ 特別養護老人ホーム千手



長岡市千秋2丁目221番地14
TEL: 0258-28-8820
FAX: 0258-28-8821

② 特別養護老人ホーム千秋



長岡市喜多町2900番地
TEL: 0258-20-5170
FAX: 0258-20-5172

① 特別養護老人ホームこぶし園



長岡市摂田屋5-9-6
TEL: 0258-39-1510
FAX: 0258-39-1512

⑥ 特別養護老人ホーム摂田屋



長岡市川崎6丁目1286番地
TEL: 0258-39-1008
FAX: 0258-39-1013

⑤ 特別養護老人ホーム川崎



長岡市美沢4丁目211-6
TEL: 0258-30-1733
FAX: 0258-30-1735

④ 特別養護老人ホーム美沢

老年問題セミナー2024

【崇徳厚生事業団（長岡医療と福祉の里グループ）主催で開催されました】

老年問題セミナーは昭和49年から始まり、今回で46回目を迎え、常にタイムリーな情報を発信してきました。令和6年2月17日（土）ニューオータニ長岡にて『地域包括ケアシステムの更なる深化と進化～とうとう2025年そして2040年に向けて』をテーマに崇徳厚生事業団が主催し、おごそかな雰囲気の中でセミナーが開催されました。

講演は厚生労働省の政策担当者、学識経験者、先駆的实施者の皆様をお招きし、多角的な視点から、地域共生社会の基盤となる「地域包括ケアシステム」を進化させる糸口として、講演いただきました。

地域医療編成では、ますますの人手不足を迎えている中で最先端のテクノロジーを活用し、地域全体が大きな病院となり、医療、福祉サービスを支える仕組みに変わり、その時代に合わせた変革や多世代共生について考える良い機会となり、今後の展望をつなぐ有意義なセミナーとなりました。



第1回福祉サービス実践・研究発表会 参加しました。
こぶし24時間ケアサービスセンター 遠藤 美和子

令和5年12月17日（日）東京都新宿区の戸山サンライズ全国障害者総合福祉センターにおいて第1回福祉サービス実践・研究発表会が開催され、「施設や事業所、在宅における日常のケアの提供等」「Ⅱ地域包括ケア、地域共生社会における多職種連携」「Ⅲ介護・福祉現場におけるICT導入、人材育成等」の3つの分科会にて全部で28題の発表がありました。

私は分科会Ⅱに参加し、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護における自宅看取りの実践について」と題し発表しました。

今後の多死社会を迎える中で、自宅で最期を迎えたいと思う方が増えることが見込まれています。それを実現するためには私たちができる事は何かを研究データやアンケート結果、事例を通して考え、その結果としてご本人とご家族への適切なタイミングでの医



療介護の情報提供、職員の資質の向上、迅速で柔軟な支援ができる体制作り、医療・介護従事者の連携を深めることなどを更に進めて行くことが必要であることを発表しました。

また、特別講演では元ヤングケアラーでフリーアナウンサーの町亞聖さんのお話を聞きました。制度に繋げることや支援方法など、広く情報提供していくことが大切であると感じました。

今回の研修を通して得た知識・情報等を今後活かしていきたいと思えます。



編集後記

作成にあたりご協力いただいた皆様へ心から感謝申し上げます。木々の芽もふくらみ、ようやく春らしくなってきました。新年度が始まり期待と不安が入り混じる時節でもあります。昨年中の良かった事、改善しなければならぬことを振り返り、新年度は皆さまの幸多からんことを祈念いたします。



ネットワークこぶし

TEL (0258) 46-6610
FAX (0258) 47-1243

社会福祉法人 長岡福祉協会
高齢者総合ケアセンター 高野園
〒940-2135 新潟県長岡市深沢町2278-8

URL <http://www.kobushien.com>
E-mail info@kobushien.com